日時		場所	会場	公演名	出演者	主催・共催	後援	入場者数
2016年 平成28年	開演	岩手県 釜石市 小佐野町	NPO法人 ガバチョ・プロジェクト	**井上ひさし手紙** 常設展示開始 **（読売新聞掲載）**	井上淑子　説明			人

井上ひさし手紙 常設

釜石 家族の絆浮かぶやりとり

記念館建設目指すNPO

作家の井上ひさしさん（1934～2010年）が釜石に住んでいた母や兄とやりとりした手紙などを常設展示するスペースが、釜石市にできた。東日本大震災がつないだ縁で実現したもので、「一行間からあふれる家族の絆を感じてほしい」という。（藤吉恭子）

釜石市で「井上ひさしプラミリー記念館」の建設を目指すNPO法人ガバチョ・プロジェクト（会員約40人）が、JR小佐野駅前にある事務所で7月から展示している。手紙や写真、ポスターなど約30点が並ぶ。

ひさしさんは上智大進学後の約2年間、休学して母マスさん（故人）が暮らす釜石市で生活、国立釜石療養所に勤務した。家族はその後も同市に残った。

手紙はひさしさんが中学時代からのもので、作家として名を成す前のものも多い。大学時代に東京・浅草の劇場で軽演劇の台本を書くことになった時は、原形をとどめないくらいに手直しされたことに「早く専属になれる様にガンバル」と書いている。芸術祭の授賞式で着る服のため母に送金を頼む手紙もある。小説家としてのデビュー作「ブンとフン」が出版された際は、「日本中の図書館に備えつけられるわけです。二万部はかたい！」と兄に喜びを伝えている。独特の丸い文字でつづり、言葉を消したり加えたりした跡もある。

手紙類は、ひさしさんの兄・激さん（故人）の妻、井上淑子さん（79）（釜石市甲子町）が保管してきた。300点以上あり、一部は県立博物館や神奈川近代文学館（横浜市）、釜石市郷土資料館で公開した。

淑子さんは当初、手紙類を仙台市などの保管機関の施設にゆだねることをすすめられたが、震災後、「かまいしの第九」演奏会の指揮者などを務める音楽家の山崎眞行さん（65）の話を聞き、気持ちを決めた。

釜石市の自宅も営業スタジオも激震も流された山崎さんは「心の復興には文化や人のつながりが不可欠。市民が集まって音楽を楽しめるサロンを作りたい」と話していた。自宅が被災を免れた淑子さんも「義母も夫も私も、釜石の世話になった。復興に向かう釜石の役に立つならば」と地元の活用を決意した。2012年にNPO法人を設立して山崎さんが理事長に就任し、被災した釜石に芸術の灯を上と準備を進めてきた。

事務所での展示は記念館への第一歩だ。淑子さんは「手紙からは、経済的に厳しくても互いに励まし合い、希望をもって努力した一家の姿が伝わる。市民に見てほしい。市外から見に来てくれる人がいれば釜石の活性化にもなる」と願う。山崎さんは「この場所から、さらに展開していきたい」と話す。

展示は原則金曜の午後1～4時で、無料。事前に連絡を。問い合わせはガバチョ・プロジェクト（0193・27・5044）。

2016 復興国体

歴史つなぐ炬火台移設

1970年の岩手国体で使われた炬火台の取り外し作業が4日、盛岡市みたけの県営運動公園陸上競技場であった。10月の岩手国体の総合会場になる北上総合運動公園北陸上競技場に積み込んだ。さび落としと塗装を施し、試験燃焼を経て、北

1970年の岩手国体で使った炬火台を取り外した（4日午後、盛岡市みたけで）

読売新聞掲載
2016年8月5日

NPO法人ガバチョ・プロジェクト
スタッフ

7月8日

山﨑眞行
井上淑子
田中健悦
山﨑詔子
古川明良
岩間正行
合田良雄
合田節子
宮村通典
藤井登
高鷹キエ
中内香苗
木村久美子